

論
説

福祉現場の構造に関する現象学的考察

——「U理論」と「魂の脱植民地化」概念を手がかりに——

竹
端

寛

目 次

- 一 はじめに
- 二 価値を巡る現象学的還元
- 三 構造的制約を括弧に括る
- 四 U理論というフィードバックシステム
- 五 不在化と魂の植民地化
- 六 障壁を乗り越える
- 七 魂の脱植民地化というプレゼンシング

一 はじめに

筆者はここ数年、福祉行政や福祉現場に関するアドバイザーやコンサルタント役割を求められる事が少なくない。本稿執筆時の二〇一一年夏現在、山梨県と三重県で、障害者福祉に関する特別アドバイザーの仕事についている。⁽¹⁾

だが、筆者自身は福祉現場でのアドバイザーになるための、特別な訓練を受けたこともなければ、福祉現場で働いたこともない。ただ、少なからぬ現場でのフィールドワークを続けてきた。大学院生時代の五年間は精神科病院

(竹端 二〇〇二、二〇〇三)で、その途中からは精神医療の質向上に取り組むNPO(竹端 二〇〇七a、二〇一一)で、またスウェーデン留学時には知的障害者の当事者グループ(竹端 二〇〇四)で、あるいは重症心身障害者の地域生活支援の拠点で(竹端 二〇〇五)…。様々な現場で、多くの当事者や支援者の声に耳を傾け続けた。教科書的知識を吸収するよりも、現場で生起している現象を観察することに重きを置いてきた。それらの臨床の場での経験が体内に蓄積した段階で、社会学や社会福祉学の「理論」と出会っていったので、現象から普遍を抽出する帰納的な理解で物事を眺め続けてきた。

それと似たスタンスで問題に取り組んだ先達がいる。たとえば社会学者ゴフマンの名著、『アサイラム』である。一九五〇年代のアメリカの精神病院をフィールドワークした上で、入院患者の相互行為や病院機能そのものの構造的問題を鮮やかに整理した名著である。その中で、特に興味深いのは次のフレーズである。

個人の自己が無力化される過程は一般に、どの全制的施設においてもかなり標準化している。この種の過程を分析することによって、われわれは、通常の営造物がその構成員に常人としての自己を維持させることを心掛けることすれば、保証されなくてはならない仕組みはどんなものか、を知ることができるだろう。（ゴフマン 一九八四・四）

ここから読み解けるのは、ゴフマンは精神病院や入所施設などの「全制的施設」(total institution)で「標準化」されている「個人の自己が無力化される過程」を炙り出すことを通じて、そのオルタナティブ、つまりは「通常の営造物がその構成員に常人としての自己を維持させることを心掛けるとすれば、保証されなくてはならない仕組みはどんなものか」を析出することが出来る、というのである。

このことの意味は、決して小さくない。

今から六〇年前は、精神病者は隔離収容するしかない、というのが当時の当たり前であった。その時代に、その「当たり前」の現場でどのようなことが行われているかを観察し、他の現場とも共通する普遍的な「個人の自己が無力化される過程」を帰納的に描き出した。しかも、それは単に研究のため、というよりも、その状況を改善するための、つまりは「通常の営造物がその構成員に常人としての自己を維持させる」ために必要な要素を対偶命題的に整理して伝えるための戦略だった。それは当時の常識から考えれば、ある意味での「枠組みはずし」的な戦略であったとも言える。精神病院というその当時のドミナントストーリー（＝強固な枠組み）の中に入り込んで、そこで生起している現象から抽出される枠組みそのものの構造を描き出すことによって、その枠組み自体の問題点や、

そうではない別の可能性を描くための要素を析出しよう、という試みだったのである。

一方、わが国で『アサイラム』に基づきながら議論をしている文献を見ると、精神病院におけるマイクロ行為論の分析が少なくない。筆者自身がそれらの論考に不満なのは、マイクロ行為論は、その行為が生起する精神病院という枠組み自体を中心的論題とすることなく、むしろその枠組みの強化にも役立つような分析になりかねない、という不満からかもしれない。もちろん様々な研究のアプローチがあってもよいので、他者の研究をとやかく言うつもりはない。だが、私は精神科病院で長期間「暮らさざるを得ない」状態におかれた人々の生のリアリティと出会うところから、自身の研究がスタートした。ゆえに、マイクロ行為論が生起する現場そのものへの根源的な問い、つまりは「なぜ何十年も入院しなければならないのか?」「なぜ精神病院での処遇はこんなに劣悪なのか?」という疑問や怒りといったものが、研究以前に存在していた。ゆえに、それをマイクロ行為論の枠組みで分析して、わかったような気になる事は、出会った障害当事者への冒瀆のような気がしていた。同じく精神分析や臨床心理学の文献も、中途半端にわかったような気になって問題を矮小化したくないから、としばらくの間、読まないでいた。

精神病院という構造的暴力にもなりうる装置を、どうしたら縮小することが出来るか。精神病を持つ人たちの支援を、精神病院以外で実現していくためには、わが国ではどうしたらいいのか? 同じ全制的施設である入所施設の問題もどうしたらいいのか? 別の国ではどういう努力をしているのか?⁽ⁱⁱ⁾ そういう関心を持ちながら関わるうちに、結局のところそれは社会学や社会福祉学という枠組みの中では解決しないので、福祉政策や行政学などの関連領域を読み漁らざるを得なくなっていく。

ゆえに、いまだに自分の「専門」とは何か、がわからない。便宜的には福祉社会学とか社会福祉学とか言ってみ

たりする。あるときまでは、そのどちらかに依拠したい、とも思っていた。だが、それらの理論的枠組みを一旦横に置き、自前の枠組みとして規定してみると、筆者の視点は、「福祉現場の構造に関する現象学的考察」とでも表現できそうだ。これは、ゴフマンのアプローチとも通底している（と勝手に感じている）。本稿では、上記の筆者なりの「枠組み」について、自らの研究や実践に絡めながら、検討してみたい。

二 価値を巡る現象学的還元

筆者の大学院時代の恩師は二人とも、研究者ではなく福祉・医療ジャーナリストだった。福祉現場で生起する問題について、理論的言語を振りかざして「わかったつもり」になるのではなく、「対象にぎりぎり⁽ⁱⁱⁱ⁾と迫れ」と指導され続けてきた。「ぎりぎり⁽ⁱⁱⁱ⁾と迫る」ためには、理論や分析枠組みありき、では通用しない。現場で生起する事態にどっぴりとつかり、目をむけ、耳を傾け続ける。それも、こちらの（理論的）枠組み（≡先入観）に当てはめようとせず、なるべくその現場の文脈そのものを読み取る中から、焦点化されている事態を把握しようと努める。その営みを通じて、現場の構造の（再）解釈から考察を立ち上げていく。だが、このアプローチは、時として現場との間で摩擦を起こすこともある。

福祉や医療の現場は、「すべき」「しなければならない」といった当為の文法（should, must）で溢れている。支援すべき、という価値が前提としてあった上で、支援実態という事実を構築していく。例えば精神科病院や入所施設に隔離収容「すべき」なのか、最重度の障害者でも地域支援「すべき」なのか、という「当為の文法」（≡価値

前提)があつて、その価値観に添う形での政策形成がなされていく。しかし現場で日常生活支援を行っている、その支援実態という事実に関心的になり(時には埋没し)、自らの事実を根拠づける価値前提にまで改めて目を向けよう、とはなかなか出来ない。すると、事実と価値の取り違えや混乱による問題も生じる。

筆者は、准看護師の資格所持者が正看護師の資格を取得する為の看護学校で教えていたことがある。その学校では、学生の大半が現場経験を持ち、また夜や週末などは准看護師として働きながら、平日昼間の講義を受けていた。筆者はそこで、身体拘束の濫用は人権侵害の可能性があると講義したところ、実際に病院で患者を縛っていた准看護師の学生達から、多くの反論が寄せられた。

「私たちの病院では人手不足でとても出来ないのが現実」

「〇〇の場合には縛らざるを得ないんです」

「実際に先生は現場に出られたことがあるのですか? 拘束は安全の為にせざるを得ないのです。なし崩しに縛る、なんて事はありません」

反論を寄せた准看護師の学生達は、現場で身体拘束をしないと仕事が実際にうまくいかない、という事実レベルの指摘をしていた。だが、筆者は人手不足の解消のため、という身体拘束の「目的外使用」や「濫用」は人権侵害ではないか(吉岡・田中 一九九九)、という価値前提の捉え直しをしようとしていた。これは、どういう違いであらうか。

オースティンは、陳述文の中には、単に生起した事実・出来事について記述する「事実確認的発言」だけでなく、「行為遂行的発言」と命名される、別形態の発言がある、という。

「行為遂行的」という名称は、「行為」(action)という名詞と共に普通に用いられる動詞「遂行する」(perform)から派生されたものである。したがって、この名称を用いる意図は、発言を行うことがとりもおさず、何らかの行為を遂行することであり、それは単に何ごとかを言うというだけのこととは考えられないということを明示することである。(オースティン 一九七八:一二)

先に示された准看護師たちの反論は、一見すると「事実確認的発言」に思える。また発言している本人もそう思い込んでいる。ただ、隔離拘束を最小化する諸外国・他地域の実践を知っている第三者(筆者)の立場からすれば、この発言の中には、「発言を行うことがとりもおさず、何らかの行為を遂行する」要素があるように思えてならない。「○○だから仕方ない」と発言することによって、「単に何ごとかを言うというだけ」に留まらず、身体拘束という「行為を遂行すること」およびその行為遂行の結果的肯定を伴っているのだ。そう捉えれば、先の発言は、「事実確認的発言」ではなく、「行為遂行的発言」であり、この「行為遂行的発言」の中に含まれている、ある行為の遂行を容認する価値観の析出こそが求められる。

その現場で行われていることの、その前提となる価値を疑うこと。この場合、身体拘束という行為遂行を是とする価値前提を覆すことになり、自らの仕事の正当性の根拠もぐらつくことになる。ゆえに学生達の感情的反発を招

く事につながった。だが、この正当性の根拠を疑う、ということこそ、理論や教科書で分かったふりをせず、「対象の本質にぎりぎりと迫る」為には必要であり、そしてこの行為は、意外にも現象学と通底している、と最近気づき始めた。

哲学者というものは単に存在しようと望むだけではなく、おのれのなすことを理解しながら存在しようと望むわけですが、ただそれだけのためにも、哲学者は、その生活的事実的与件のうちにひとりでに含まれている全ての断定を一旦停止しなければなりません。しかし、さまざまな断定を停止するということはそうした断定の存することを否定することではありませんし、ましてやわれわれを物理的・社会的・文化的世界に結びつけている鎖を否認することではなく、逆にそうした結びつきを見ること、意識することです。これが「現象学的還元」というものであり、そしてその現象学的還元だけが、そうした絶えざる暗黙の断定、各瞬間のわれわれの思考の裏に隠れている「世界の定立」を露呈してくれるのです。（メルロ＝ポンティ 一九六四…一七）

「全ての断定を一旦停止」する。「人手不足」「安全の為に」「〇〇の場合には」「縛らざるを得ない」という「行為遂行的発言」の背後にある「断定」を「一旦停止」する。その上で、「断定の存することを否定する」のではなく、それらの「断定」の根拠となる「物理的・社会的・文化的世界に結びつけている鎖」を「見ること、意識すること」が大切だ、とメルロ＝ポンティが言う。つまり、身体拘束は「仕方ない」「それ以外の方法は無理だ」という「断定」がどのような「物理的・社会的・文化的」要素で構成されていて、どのような価値前提に基づいている

のか、を「見ること、意識すること」が大切だ、というのだ。これは「現象学的還元」の営みであり、こうした営みを通じて「そうした絶えざる暗黙の断定、各瞬間のわれわれの思考の裏に隠れている『世界の定立』を露呈してくれる」。「対象にぎりぎり迫る事を通じて、ついにはある「断定」の「裏に隠れている『世界の定立』」とも向き合うことが出来るのである。では、「世界の定立」とはいったい何を意味するのであるのか？

三 構造的制約を括弧に括る

メルロ＝ポンティの前掲本の訳者は、訳注において次のように指摘している。

われわれは、日常的な生き方―これをフッサールは〈自然的態度〉と呼び、ハイデカーは〈日常性〉と呼ぶのであるが―にあつては、自分の経験するさまざまなものとや、さらには自分自身をさえ〈世界のなかに存在するもの〉であると素朴に断定している。つまり、われわれはこの経験にさいして、非主題的にはあるが、世界の存在を定立し確信して生きているのである。これをしも先入見というならば、これこそがもつとも根源的・包括的な先入見であろう。この素朴な、つまり無反省になされている断定を停止し、それをそれとして露呈してくれるのが現象学的還元なのである。(メルロ＝ポンティ 一九六四・三〇九)

私達の「日常的な生き方」においては、「非主題的にはあるが、世界の存在を定立し確信して生きている」。福祉

社や医療現場で日々支援を行う、という「日常的な生き方」において、その現場でルールや所与の前提とされていること、「仕方ない」「無理だ」とされていることを、「そういうものだ」と、そのものとして内面化しないと、日々の仕事をこなしてはいけない。「そういうものだ」という発言は、実際には「行為遂行的発言」なのだが、あたかもそれを「事実確認的発言」と思い込み、「世界の存在の定立を確信」することで、ルーティーンの業務を遂行していく。これこそ、「素朴」な「断定」である。

だが、この「そういうものだ」という「断定」は、「これこそがもつとも根源的・包括的な先入見」なのではないだろうか。例えば先ほどの「人手不足だから、安全確保の為だから、〇〇だから、身体拘束は仕方ない」という「断定」。「これこそがもつとも根源的・包括的な先入見」であるとき、この「断定を停止し、それをそれとして露呈してくれる」「現象学的還元」を行う。筆者は現場に入り込んで観察する第三者として、「対象にぎりぎり迫る営みを通じて、結果的に「現象学的還元」を行ってきた。事実の背後にかかる価値前提を引きはがし、捉え直そうとした。それは時には現場の反発も浴びた。だが、この「現象学的還元」のアプローチは、うまく使えば、現場に関わる外部者の強みとしても活かせる。これが、冒頭で述べた、現場で働いた経験もない若造である筆者が、なぜ福祉現場の改善役割を求められるのか、とつながってくる。

一般企業が社会情勢や対象者・顧客のニーズの変化に合わせて淘汰や変容をするように、福祉現場も社会情勢や顧客のニーズ、政策の変化などに合わせた変容が求められている。だが、一般企業と違って、福祉領域は弱者救済という公的要素が強い分野であるがゆえに、なんとなく「ぬるま湯」的に残ってしまえる。さらにいえば、利用者と提供者の間の権力の非対称性が強い分野であり、「お世話になっている」利用者は文句を言いにくい（竹端 二

〇〇二)、という実態があるため、なかなか現場の体質改善がしにくい。それに輪をかけるように、人員配置・報酬単価基準の低さや制度改革の重なりもあって、「目の前の対応に精一杯」で、問題があることはわかっているが、どこからどう変えてよいのかわからない福祉現場がたくさんあるのだ。

その際、外部者である筆者に求められるのは、外在的理論を振りかざすのではなく、その組織なり地域なりの内在的論理を掴んだ上で、その内在的論理の方向を転換させたり、(再)蘇生させたり、という支援である。「対象にぎりぎりと迫」るなかでその構造的問題を把握した上で、「ではどうすればいいのか？」の対案を、現場の人と一緒に模索し、デザインし、実践していくことである。これは、枠組み構造や価値前提そのものを表面化・現前化させ、その構造的制約自体をもいったん括弧にくくり(現象学的還元)、あるべき姿と現実の落差の中で、何をどう変えていけば具体的に変容可能か、を考える仕事でもある。^(v)

ミクロレベルの実践における変容可能性は検討しても、組織なり制度なり地域といった「全体像」自体は、変えられない所与の現実として、ある種の「宿命論的」に「しかたない」と諦めている福祉現場がある。「構造的制約自体を括弧にくくる」事自体の必要性はわかっている、その具体的な方法論がわからず当惑している場合も少なくない。そのような状況の中で、外部者である筆者はこの全体的構造に対する「宿命論的」な視点とも戦い続けてきたのかもしれない。本当に「仕方ない」のか？ 変容可能性はないのか？ 枠組み自体は問い直さなくていいのか？

福祉現場の「構造的制約」とは、今の日本社会の構造的制約に強い影響を受けている。特に財政緊縮が叫ばれ、新自由主義的風潮が強まった二〇〇〇年代以後、「納税者の納得」「公平・平等」を盾に、支援が必要とされる人々

への政策を抑制しようとする「構造的制約」の風は強くなってきた。そんな時代背景の中だからこそ、その「構造的制約」自体を捉えなおし、現場レベルでも出来る対抗策、「あるべき姿」に向けたオルタナティブや改善をしていかないと、ますます現場は煮詰まるし、硬直化してしまう。そういう危機意識を持った現場の人々と、今ある素材を使う中で、今ない現実を作り出すための模索を、必死になって行ってきたのかもしれない。

そして、この「構造的制約を括弧に入れ」「今ない現実を作り出すための模索」という営みは、あるイノベーション理論とも通底していた。

四 U理論というフィードバックシステム

第一線で活躍する一五〇人以上の科学者や起業家グループへのインタビューを続けてきたオットー・シャーマーは、すぐれたイノベーションが生まれる過程をU理論として描き出した。このU理論は次の七つのシフトから構成されている（シャーマー 二〇一〇：七三）。

(1) ダウンローディング (Downloading) : 過去のパターンを再具現化する―世界を自分の思考のいつもの物差しで見る

(2) 観る (Seeing) : 判断を保留し、現実を新鮮な眼で見る―観察されるシステムは観察する者とは分離されている

(3) 感じ取る (Sensing) : 場に結合し状況全体に注意を向ける—観察する者と観察されるものとの境界がなく
なり、システムがそれ自体を見るようになる

(4) プレゼンシング (Presenting) : 未来の領域が生まれてくるもつとも深い源につながる—源から見

(5) ビジョンと意図を結晶化する (Crystallizing) : 新しい考えを出現する未来から見て明確化する

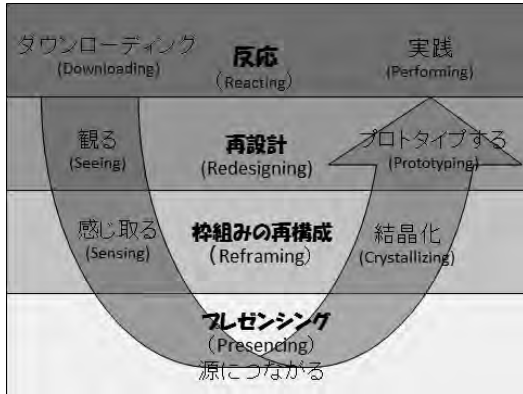
(6) 生きているマイクロコズムをプロトタイプする (Prototyping) : 実践によって未来を切り拓く—新しいものを「宇宙との対話によって」具現化する

(7) 新しいやり方・仕組みを実行・実体化する (Performing and embodying) : より大きな共進化する生態系の中に根付かせる

この七段階をアルファベットのUの字に例えたのは、次のような深化と創造プロセスをUの字で象徴しようとしているからである。それは、まずUの左側として、(1) 通常の反応をする (Reacting) 段階で解決出来ない問題について、(2) 再設計する (Redesigning) 段階、(3) 枠組みを再構成する (Reframe) 段階を経て、(4) 出現する未来を感じる (Presencing) 段階にまで掘り下げていく。その「もつとも深い源」から、今度はUの右側の上昇プロセスが生まれる。具体的には、(5) 出現する未来を結晶化する (Reframe) 段階、(6) 結晶化されたものを試作モデル (プロトタイプ) として現実化する (Redesigning) 段階、さらには (7) その試作モデルを現実の中に普遍化させる (Reacting) 段階へと高まっていく (シャーマー 二〇一〇 : 八三)。

シャーマーはなぜこのような構造を描き出すことが出来たのか。それは彼が「盲点」に気づくことが出来たから

図1 U理論 (出典: シャーマー (2010) の p63、p83の図を元に筆者改変)



だ。彼はその「盲点」について次のように語っている。

盲点とは私達の内面、あるいは周辺にあつて、私たちの意識や意図が生まれている場所である。何か行動を起こすときの起点と見えよう。なぜ「盲点」かといえば、それは私たちの社会的な場、日常的に行われている社会的な相互作用の目には見えない側面を指しているからだ。この社会的な場の見えない側面は、社会的な場が成立しはつきりと表れてくる場所である源に関わっている。(シャーマー 二〇一〇:三七)

この「盲点」とは、本稿で考察してきた「世界の定立」や「価値前提」とも通底する。この「盲点」を「無反省になされている断定的」として現象学的還元をするだけでなく、「何か行動を起こすときの起点」(＝源)と捉え、そこまで深く降りていくことによって、創造の起源にまで立ち返り、そこからイノベーションを捉えよう、というダイナミズムがあるところが、このU理論の特徴である。つまり、ある事実を規定している価値前提や当為の文法を疑うだけでなく、その価値前提を「何か行動を起こすときの起点」(＝創造の起源)と捉え、そこから問題を捉え直し、革新的なやり方につなげていこう、という考え方なのである。

このU理論の(1)～(3)のプロセスを現象学的還元、(4)を現象学的還元による創造の起源へのアクセス、そして、(5)～(7)を新たな構造化に基づく再文脈化、として考えると、どういふことが言えるだろうか。

暗黙の価値前提(＝世界の定立、盲点)を疑わない状態をダウンローディング(1)とするならば、そこから「断定を一旦停止」して、「物理的・社会的・文化的世界に結びつけている鎖」を「新たな眼」で「見ること、意識すること」が「観る」ということになる(2)。その上で、「世界の定立」を「感じ取る」ことにより、「システムがそれ自身を観察する」(＝枠組みそのものを問う)というメタ認知的視点を持つことが出来る(3)。これらのプロセスを経ることにより、価値前提が複数あり対立しているという「世界観の多数性の本質的理由」(竹田 二〇〇九・七五)が明らかにになると共に、その問題を構造的に捉えることが出来るようになる(プレゼンシング・未来の領域が立ち現れる＝創造の起源へのアクセス)(4)。その上で、立ち現れた「何か」を方法的に「結晶化」(5)する中で、文脈そのものを変える再文脈化のプロトタイプが出来上がる(6)。そこから、「より大きな共進化する生態系の文脈の中に根付かせる」再文脈化の実践と体系化が出来上がる(7)。

つまり、U理論の左側で現象学的還元を帰納的に行うことにより、底であるプレゼンシング(＝出現する未来、創造の起源)にたどり着く。そして、その底をスイッチングポイントとして、右側では演繹的な再文脈化を行うことにより、枠組みそのものの捉えなおしと、文脈そのものの書き換えやパラダイムシフトの実践化に結びつく。現象学的還元と再文脈化は一つのフィードバックシステムとして規定することが出来る、と言えるだろう。

五 不在化と魂の植民地化

シャーマーによれば、このU理論がうまく作動する為の要諦は、「Open Mind（開かれた思考）」「Open Heart（開かれた心）」「Open Will（開かれた意思）」の三つである。この三つの「開放」とイノベーションはどう関係付いているのだろうか？ これはその対偶命題である「閉ざされた思考、閉ざされた心、閉ざされた意思」を考えれば、理解がしやすくなる。

私達は日常的な時間・空間を過ごす中で、「所与の価値前提」「当たり前の枠組み」といったものを再生産し続けている。特に、筆者が関わる福祉現場においては、日々の介護や介助、生活支援などの定常性の高い仕事が進み込まれている。すると、そのルーティーンの支援を受ける当事者や家族にとっても、その支援を供給する支援者にとっても、あるいはそこに税金を投入する行政機関にとっても、これらの「安定性の崩壊」は困った事態になる。であればこそ、まずは「安心」「安全」を求める気持ちが強く働き、現に安心・安全が確保されている支援について、それが入所施設や精神科病院での支援であれ、安心・安全が確保されていることを理由として、隔離収容などのその他の問題性には蓋をし、見なかったことにする。あるいは「現状では仕方ない」「どうせ無理だ」という呪縛をかけて、問題の本質に向き合おうとしない。この構造的忌避の体質こそ、「閉ざされた思考、閉ざされた心、閉ざされた意思」の連動するものだ。シャーマーはその行き着く先が、「出現する未来（プレゼンシング）」とは対局に位置する、「不在化」と表現した。ヒトラーの個人秘書として、ナチス政権末期に地下室でヒトラーと一緒に

立てこもったトラウドル・ユンゲを例に出しながら、シャーマーは「不在化」概念を次のように整理している。

彼女は、意識を持たない機械人形のように日々の仕事をこなしていた自分を語っている。外界で展開している破滅的状况からだけでなく、彼女は真の自己からも切り離されていた。「私達は機械人形のように動いていました。そのときの感情はまったく思い出すことができません。もはや自分が自分ではないような状態にいたような気がします。」(シャーマー 二〇一〇：三三七)

この「機械人形」のような「真の自己からも切り離されていた」状態としての「不在化」。これを、深尾は「魂の植民地化」として整理している。

人間の魂が、何者かによって呪縛され、そのまっとうな存在が失われ、損なわれているとき、その魂は植民地状態にあると定義する。一定の人間集団が、政治的、軍事的、経済的に植民地状態にあったとしても、そこに生きる人々の魂が、呪縛されていなければ、その精神は植民地化されているとはいえない。あるいは制度的な植民地状態から、国家的独立を果たしたとしても、個々人の精神が内部で深く植民地化されている場合には、その植民地的魂は、長く人々の心に居座り続け、植民地の心性がひきつづき、蔓延することとなる。(深尾 二〇〇九：一〇)

「機械人形」になる、ということとは、「植民地的心性」の深い内面化、である。「人間の魂が、何者かによって呪縛され、そのまっとうな存在が失われ、損なわれている」時には、「自分が自分ではないような状態」であり、「そのときの感情はまったく思い出すことができない。そして、この「不在化」＝「魂の植民地化」は、現象学的還元や盲点を探る動きにも蓋をしてしまう。

生きる過程において、人間はさまざまな呪縛を身にまとい、囚われ、みずからのありようを制約する。このように自ら囚われることを「自己呪縛」と呼ぶ。何者かによって呪縛されているということを認め、認識することとは難しいが、「自己呪縛」にある状態を認識することは、さらに困難である。知覚する主体自身が、呪縛の罠にはまっており、自分自身が呪縛にかかっていることを感じられない。そればかりか、呪縛をかけられている人間や価値観を積極的に擁護し、自ら進んでそれを受け入れ、信奉していると知覚する場合が多い。仮に身近な他者が、呪縛にかかっていることを指摘しても、それは徒労に終わるばかりか、逆に強い反発をかうことになりかねない。(深尾 二〇〇九・九)

現象学的還元とは、「断定の存することを否定する」のではなく、それらの「断定」の根拠となる「物理的・社会的・文化的世界に結びつけている鎖」を「見ること、意識すること」であった。だが「自己呪縛」は、「自分自身が呪縛にかかっていることを感じられない」だけでなく、「自ら進んでそれを受け入れ、信奉していると知覚する場合が多い」。つまり、「世界の定立」を「自ら進んでそれを受け入れ」た、と自己決定の結果であると判断し、

「自分自身が呪縛にかかっていることを感じられない」のである。その「呪縛」が、どのように「みずからのありようを制約する」のか、についての検証作用がなくなってしまう。それは「真の自己からも切り離されていた」「機械人形」である。魂の呪縛された「機械人形」は、自らの魂を植民地化・不在化する「世界の定立」と向き合うチャンスを失うばかりでなく、その事を周りに指摘されても、「強い反発をかうことになりかねない」。「閉ざされた思考、閉ざされた心、閉ざされた意思」は、このような形で、人々の魂を不在化＝植民地化＝自己呪縛化、してしまうのである。

六 障壁を乗り越える

筆者が関わる福祉領域においても、このような魂が不在化＝植民地化＝自己呪縛化された状態にある人と出会うことは、決して少なくない。

「○○だから仕方ない」「どうせ無理だ」「そんなの理想論だ」「やってもいない者が口出しするな」

筆者自身が現場における様々な変革への問いかけをした時に、これらのフレーズを少なからぬ現場の人に言われた経験を持っている。このような「閉ざされた思考、閉ざされた心、閉ざされた意思」による呪詛のような諦念の言葉がなぜ福祉現場の人々の口から繰り返し出てくるのか。このことについても、シャーマーは的確にその背景を

分析している。

深いレベルに心を開くためには、次の三つの障壁を乗り越えなければならない——評価・判断の声 (VOJ: Voice of Judgment)・皮肉・諦めの声 (VOC: Voice of Cynicisms)・恐れの声 (VOF: Voice of Fear) である。(略)
深い源と出現の流れへと向かう旅に出た者は誰でも、思考と心と意思の変容に関する三つの強力な力に直面する。

・VOJ: 古くて限界づけられている判断・思考のパターン。これを終了させるあるいは保留する能力がなければ創造性に向かって進むことは出来ず、U曲線のより深いレベルに達することはできない。

・VOC: 我々を取り巻く場に飛び込むことを阻む、皮肉、傲慢さ、冷淡さといった断絶的な感情。

・VOF: なじみのある自己や世界を手放すことへの恐れ、前に進む事への恐れ、無の世界に身をゆだねることへの恐れ。

Uのより深いレベルから作用する能力は、システムが抵抗からくる力や挑戦に対峙できる度合いによって決まる。至高体験は誰にでも起こり得る。しかし、この抵抗の力を退ける修練をした人々だけが、社会的な出現のより深いレベルと領域から確かな行動がとれるだろう。(シャーマー 二〇一〇: 三二三—三二四)

他者による評価・判断の声 (VOJ) は、「創造性に向かって進むこと」を希求する「思考」を、既知のパターンに押しとどめる。それでも何とかしたいと「心」を開いて一歩踏み出してみても、「そんなの無理だよ」という

皮肉・諦めの声（VOC）は、たちまち「断絶的な感情」として支配する。例えば上記二つの障壁を乗り越えたとしても、「なじみのある自己や世界を手放すことへの恐れ、前に進む事への恐れ、無の世界に身をゆだねることへの恐れ」という恐れの声（VOF）が「自己呪縛」となる限り、意思は開かれることなく、「抵抗の力」の前で打ち碎かれる。これらの「三つの障壁」を乗り越えるためには、「抵抗の力を退ける修練」、つまりは現象学的還元をする中で、魂の不在化＝植民地化＝自己呪縛化という「断定」の根拠となる「物理的・社会的・文化的世界に結びつけている鎖」を「見ること、意識すること」が必要だ。もしも「抵抗からくる力」に負けてしまうと、この「不在化」は必然的に「組織制度の硬直化」や「集団的崩壊」をもたらし、とシャーマーは指摘する。

福祉現場におけるこれらの「硬直化」「崩壊」の危機において筆者が行ってきた事は、「三つの障壁」をどう乗り越えるのか、のコーチングであった。魂の不在化＝植民地化＝自己呪縛化の危機にあつて、ベクトルを逆方向に回して、集団や組織、システムが再生するための条件を探る再構造化であった。現場の定常性が、いつの間にか官僚性の逆機能に通底する何かにすり替わり、継続性・安定性は担保されるものの、制度やシステムの硬直化をもたらす弊害を沢山見てきた。また、現場の人自身が、その弊害状況に直面しながら、そこからどう変わればいいのか、のきっかけや入り口を探しあぐねている場合も少なくない。あるいは、問題を感じながらも、問題の構造全体を理解できていない場合もある。三つの障壁のどこかで立ちすくみ、それ以上前に進めない、というデッドロックにさしかかっている人も少なからず見てきた。

ゆえに、三つの障壁を乗り越えるためには、現場の実践者と研究者の協働実践の中で、その問題全体と「開かれた思考」で向かい合うことから始める必要がある。その中で「開かれた心」でシステム全体の声を聴き、現場の

定常性という偏見・先入観からも、そして観察者の偏見・先入観からも自由になった「開かれた意思」を持って眺め続けるからこそ、「不在化」とは真逆の、「出現する未来」を感じることができる。これこそ、「魂の脱植民地化」作用そのものでもある。

「不在化」＝「魂の植民地化」のプロセスが、外部から押しつけられた、あるいは「所与の前提」とされた社会システムの構造パターンの盲信（ダウンローディング）と、それに基づく行動という「思考の省略」がその基盤にあるとすると、「出現する未来」＝「魂の脱植民地化」は、状況や己自身の構造に関する「物理的・社会的・文化的世界に結びつけている鎖」を徹底的に見続けることである。つまり「思考の停止・省略」をせず、「開かれた思考」のまま、深く潜り続ける、ということだ。現象学的還元、つまり判断は保留にしたまま、「心」と「意思」も開き、感じ続ける。そうして全体像を眺め続ける中で、「内なる源」（＝プレゼンシング）へとたどり着ける。これは、三つの障壁という「抵抗」を突き抜けて、岩盤を掘り続けるように、井戸を掘り下げることによって、井戸の先に「内なる源」という鉱脈にたどり着くプロセスとも描くことが出来る。

七 魂の脱植民地化というプレゼンシング

思えば筆者が小さいときから一番嫌いだった言葉が、「仕方ない」「無理だ」という言葉だった。自分自身の可変性、社会の可塑性に対する蓋として機能するような呪詛のように聞こえて、直感的に反発していた。だが、大人になり、自身が「社会化」される中で、いつのまにかこれらの呪詛を内面化し、「自己呪縛」を正当化している自分

自身もいた。だが一方で、大学院生の頃から、多くの障害当事者と出会う中で、彼ら彼女らが精神科病院や入所施設という場で、構造的暴力に直面し、そこに幽閉されている実態も見てきた。障害があるが故に、「他の者との平等」な社会環境から阻害され、役割や尊厳などが剥奪されているのか。そういう疑問を持ちながら、研究を続け、現場にもコミットし続けてきた。

それゆえに、U理論と魂の脱植民地化理論は、人々の認識構造（価値前提）と、それに基づく社会システム構造（事実）の二つのレベルの変容を導くための、大きな鍵となる理論である、と実感している。本稿を閉じるにあたって、その二つの理論の要諦について、検討しておきたい。

我々が、自らの魂の脱植民地化過程を伴いながら、探求し、探索しているものは何か。現時点でおぼろげながら見えているものを以下に列挙して、小論の締めくくりとしたい。

1、我々が求めるのは、魂の抑圧や、監督による社会秩序ではなく、創発にもとづいた自由な魂による社会である。

2、それを実現するために、我々は、動的な秩序を模索する。

3、魂の自由は、「呪縛」からの解放によってのみ獲得されうる。

4、日常のコミュニケーションの中で、不可避免的に押し寄せてくる支配や呪縛の罟を払いのけ、自己欺瞞によらない生を実現することが魂の脱植民地化過程である。

5、自らの植民地性を払拭する努力を続けることで、「自主」「自律」「自発」に基づく社会を構築する。そ

のような社会を我々は「自豪」（自ら誇りに思う）する。（深尾 二〇〇九・三七）

我々はみな、一つではなく二つである。個人やコミュニティはそれぞれ一つではなく二つである。一方では、我々は過去から現在への旅を通してできあがった個人やコミュニティ、つまり現在の自己である。他方では、別の私が存在する。眠っている自己、つまり、これから旅を通して生み出され、命を与えられ、現実になるのを我々の中で待っている自己がある。プレゼンシングはこの二つの自己を結合するプロセスである。未来から我々の真の自己へ近づいていくことだ。（シャーマー 二〇一〇・二四八）

「仕方ない」「無理だ」という諦念（＝呪詛）は、ドミナントストーリー（＝強固な枠組み）が強く支配的な社会、それ以外の選択肢の存在を許さない原理主義的領域等において、それへの「抵抗」を内側に持ちながらも、一歩踏み出せずに飲み込まざるを得ない状況に人を構造的に追い込む（＝魂を植民地・不在化する）力を持っている。そして、構造的に追い込まれた現実を、「行為遂行的発言」と意識すること無く、暗黙の前提化して「事実確認的発言」として述べることにより、その枠組みを内在的論理として組み込む。このプロセスは、「魂の抑圧や、監督による社会秩序」が生み出した「自己呪縛」のそれでもあり、「過去から現在への旅を通してできあがった個人やコミュニティ、つまり現在の自己」として、暗黙の前提として根付いてしまっている。その際、「開かれた思考」「開かれた心」「開かれた意思」に従って現象学的還元の旅に漕ぎ出すことは、評価・判断の声（VOJ）、皮肉・諦めの声（VOC）、恐れの声（VOF）という三つの障壁と直接対峙する事が求められる、ということである。「世界

の定立」の「暴露」を防ぐための「植民地化」作用の障壁は、並大抵では切り拓かれるものではない。だが、「日常のコミュニケーションの中で、不可避免的に押し寄せてくる支配や呪縛の罍を払いのけ、自己欺瞞によらない生を実現すること」を通じて、上記の三つの障壁は取り払うことが出来る。その上で、『呪縛』からの解放によってのみ獲得されうる「魂の自由」とは、「眠っている自己、つまり、これから旅を通して生み出され、命を与えられ、現実になるのを我々の中で待っている自己」との出会いでもある。その出会いの場である「ブレゼンシング」(＝内なる源)の場から、「二つの自己を結合するプロセス」に旅立つ「動的な秩序」に身をゆだねることによって、「自主」「自律」「自発」に基づく社会」の構築が少しずつ近づいていく。

「未来から我々の真の自己へ近づいていくこと」は、自分自身や自身が属する社会を「脱植民地化」する上での、出発点(アルファ)であり到達点(オメガ)でもある。このプロセスは、福祉現場の構造的制約を括弧に入れ、脱植民地化過程への跳躍を模索するための現象学的考察の一形態でもある、と言えるだろう。

筆者の拙い研究や実践も、この出発点・到着点にたどり着くための漸近線の旅路なのかもしれない。

附記…本稿では福祉現場の構造を掴むための現象学的考察に焦点化した。筆者自身の魂の脱植民地化につながる現象学的考察とメタ認知的視点の獲得に関しては、竹端(印刷中)で検討したので、ご関心のある方はそちらも参考にされたい。

参考文献

- 深尾葉子（二〇〇九）『魂の脱植民地化とは何か―呪縛・憑依・蓋―』『東洋文化』八九号、九―四〇頁。
- ゴフマン、アーヴィング（一九八四）『アサイラム―施設被收容者の日常世界』誠信書房。
- メルロリボンティ、モーリス（一九六六）『人間の科学と現象学』『眼と精神』みすず書房、三―九六頁。
- 野口裕二（二〇〇二）『物語としてのケア―ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院。
- 大熊一夫（二〇〇九）『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』岩波書店。
- 大熊由紀子（一九九〇）『寝たきり老人のいる国 いらない国』ぶどう社。
- オースティン、J・L・（一九七八）『言語と行為』大修館書店。
- シャーマー、C・オットー（二〇一〇）『U理論―過去や偏見にとらわれず、本来に必要な「変化」を生み出す技術』英治出版。
- 竹端寛（二〇〇二）『ボランティアとは言わないボランティア』『ボランティア学研究』二号
- 竹端寛（二〇〇三）『精神障害者のノーマライゼーションに果たす精神科ソーシャルワーカー（PSW）の役割と課題』大阪大学大学院人間科学研究科博士論文。
- 竹端寛（二〇〇四）『スウェーデンではノーマライゼーションがどこまで浸透したか？―グルンデン協会における self advocacy のあり方とイエテボリ市における地域生活支援ネットワーク調査に基づいて―』『平成一五年度厚生労働科学研究障害保健福祉総合研究推進事業日本人研究者派遣報告書』<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/other/takebata.html>
- 竹端寛（二〇〇五）『地域移行後の障害者地域自立生活を支えるスタッフ教育のあり方に関する基盤的研究』『平成一六年度厚生労働科学研究障害保健福祉総合研究推進事業報告書』<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/japan/takebata/index.html>
- 竹端寛（二〇〇七a）『入院患者の声』による捉え直し―精神科医療と権利擁護』『支援の障害学に向けて』現代書館。
- 竹端寛（二〇〇七b）『地域移行と権利擁護』『福祉先進国における脱施設化と地域生活支援』現代書館。
- 竹端寛（二〇〇九）『福祉行政職員のエンパワメント研修』山梨学院大学『法学論集』六三・三一―三八―三五八。
- 竹端寛（二〇一）『NPOのアドボカシー機能の『小さな制度』化とその課題―精神医療分野のNPOの事例分析をもとに』『ノン・プロフィットレビュー』一一（二）
- 竹端寛（印刷中）『枠組み外しの旅―宿命論的呪縛から真の〈明晰〉に向かって―』『東洋文化』九二号。

竹田青嗣(二〇〇九)『現象学は〈思考の原理〉である』ちくま新書。
吉岡充・田中とも江(二〇〇九)『縛らない看護』医学書院。

注

- (i) 障害者自立支援対策臨時特例交付金の特別対策事業における「特別アドバイザー」のことで、山梨では五年目、三重でも四年目になる。
- (ii) 入院・入所施設の構造的課題やその解決方法については竹端(二〇〇二、二〇〇三、二〇〇七a、二〇〇七b)で考え続けた。
- (iii) 「対象にぎりぎり迫る」指導教官二人の姿勢は、二人の主著のタイトル、『寝たきり老人のいる国 いない国』(大熊 一九九〇)、『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』(大熊 二〇〇九)に凝縮されている。ちなみに両書とも、福祉政策のパラダイムシフトをもたらす一冊となっている。
- (iv) たとえば、日本の精神科医療の現場では、看護師の人員基準は他科の三分の二でよい、という「精神科特例」制度が実質的に温存されているため、特に夜勤帯では人手不足が恒常的になっている、などの「鎖」がある。この点は詳しくは竹端(二〇〇七a)参照。
- (v) この現場の内在的論理に基づく構造化支援については、三重県での実際に行った独自研修プログラムの作成をテーマに竹端(二〇〇九)において考察した。
- (vi) 再文脈化概念は、ある枠組みにおける現在の「支配的な物語(ドミナントストーリー)」に対置させる形で、「反・支配的な物語」として物語を書き換え、語り直すナラティブセラピー理論の中で詳しく検討されている。詳しくは野口(二〇〇二)を参照。